

〈追悼〉

佐伯隆幸副会長の死を悼む

渡邊守章（日仏演劇協会名誉会長）

昨年十二月に、京都で『縞子の靴』全曲版の日本初演を果たして帰ってきて、そういえば佐伯は来なかったが、風邪でもこじらせていたのだろうかと思っていたところへ、夫人から電話で、病状が急に悪化して亡くなったというお電話があった。十月二日の日仏演劇協会の例会で、『縞子の靴』の演出のことを喋って、久しぶりに食事をし、「補聴器を変えたから大きな声でしゃべらなくてもよくなった」と、にこにこしていただけに、ただただ茫然とするばかりであったし、事態の急変に、夫人のご苦労は如何ばかりかと、文字通り言葉もない有様であった。

思えば、佐伯隆幸という人の存在を知ったのは、遡れば、彼が学習院の院生であり、私は非常勤のフランス語教師として教えに行っていた一九六〇年代の初頭のことかと記憶するが、「演劇人」としての、いやより正確に言えば「闘う演劇人」としての佐伯隆幸の存在を知らされたのは、70年代初頭からの、「黒テント」の活動以後である。もっとも、当時のジャルゴンで言えば「アングラ御三家」の内、佐藤信率いる「黒テント」は、一番ご縁が薄かったから、「大型テント芝居」になって、東京の郊外で、「黒テント」の入り口を睥睨している「オフ・ホワイトの三つ揃え」を着込んだ「お兄さん」とは、余り口をきく機会もないままに過ぎたように思う。ただ、フランスの月刊誌『エスプリ』が、「日本特集」をするというので、当時、中央公論の編集部にはた埴嘉彦がコーディネーターとなって、私は、いわゆる「アングラ御三家」、つまり唐十郎の「黒テント」、鈴木忠志の「早稲田小劇場」、そして佐藤信の「黒テント」（正しくは「演劇集団68／71」）を中心に、「演劇・肉体・言語——日本の前衛劇における〈始原神話〉」という論考を、フランス語で書き、一九七三年の二月号だけに掲載されるという、「所謂アングラ御三家」との付き合いの中で、佐伯隆幸という存在も、おそらく「運動体」の理論化のなかで、存在を増していったのであろうと、後になって推測することになった。（因みに、なにしろ四十年も前のことであるから、この論文の日本語版の初出を書いておけば、『虚構の身体——演劇における神話と反神話』（中央公論社、一九七八年）であり、フランスにおける日本の前衛劇分析としては、相変わらず唯一の資料となっている。）

一九七〇年代といえ、私が二度の長期フランス留学を終えて、一方では舞台の現場に接近を始め、その最初の冒険が、観世寿夫たち、主として能狂言の役者と、新劇の舞台部が共同制作をした「冥の会」で、アイスキュロスの『アガメムノン』を一九七二年に、セネカの『メーデーア』を一九七五年に演出するという幸運に恵まれ、その間に、のちに学位請求論文とする「クローデル論」を書き、三度目の長期フランス滞在を、パリ第三大学演劇研究科の客員教授もするというアクロバットをしながらやり通し、拳句は、演劇集団「円」の企画委員・演出家として、全面的に「舞台の現場」にコミットする時期であった。

丁度この時期、つまり一九七〇年代に、佐伯隆幸は、フランス演劇の現場を迫及するために、フランス滞在を企て、この時期のフランスの劇場の〈創造力〉と〈批評的言説〉とを、彼自身の思考と言説の最も重要な〈場〉とするという、演劇人として大きな転換を果たす。それは、現代演劇の分析家佐伯隆幸にとっては、極めて豊饒な体験の幕開けであり、「単にパリへ行って芝居を見て帰ってくる」というのではなく、舞台創造の現場と、その需要の実態についての、多重的《視座》と《言説》とを手に入れたのである。時間的に言えば、少なくとも暮から正月休みにかけての時期、そして一九七〇年から二年近くに及ぶ「留学」が、彼の生活の上でも、創造作業の上でも——その間に、病魔に侵されるという事態はあったにもせよ——最も網羅的かつ厳密な「演劇体験とその言説化」という作業に、文字通り「生き甲斐」を覚えた時期であったろう。『二十世紀演劇の精神史—収容所のチェーホフ』（1982）から『記憶の劇場／劇場の記憶——劇場日誌 1986-2000』（2003）へと、その十冊を超える《フランス演劇の現在》に関する批評的証言は、著者の執拗さを情熱に変換した《エクリチュール》の展開によって、ほとんど読むものを呆然とさせる《強度》に貫かれている。そもそも、この時期には、「パリへ行って芝居を観る」という《作業》自体が、膨大なエネルギーを要求する作業である。私自身の経験としても、「一週間の会議に招かれて行って、その期間中に十本の芝居を観る」、というような「暴挙」が、要求される時代でもあったのだ。その意味では、「観て・書いた」というだけでも、「証言」としては貴重なのであるが、そこに彼特有の「批評的視線」と「批評的エクリチュール」を絡ませる作業を見せられて、その実態の「容易無さ」を知る者としては、この「アーカイヴ」を前にしただけで、ほとんど呆然自失、言葉を失うほどであった。

二十世紀の最後の四半世紀と、二十一世紀の最初の十年ほど、この間のフランスの劇場で起きていたことを知るには、フランス語で書かれたものの中にさえ、これほどのスケールと丹念さと、さらには批評的視座を保ってきた書物はないと思われる。この「エクリチュールの闘い」に比べれば、彼が、晩年というには早すぎる時期に、責任者となって刊行した現代フランス語圏演劇の翻訳などは、敢えて暴言を吐くならば、彼でなくともできたのではないかと思う。そして、実作の上で、彼が情熱の対象としたコルテスの戯曲の翻訳と上演も、果たして彼の抱いたコンセプトやイメージに応えるものであったかも、疑問は残る。敢えて言えば、残された者たちの、挑戦すべき豊饒な荒野を、とにかくそこに開いて見せてはくれたのである。

プランション、シュロー、ヴィテーズという、年代上のずれはあるが、しかし「五月革命」の後で、「公式の前衛」と認められる世代より前の、つまり、バロー、ヴィラルールによって代表される「第二次大戦後演劇の先駆者」の作業と舞台によって、二十世紀のフランス演劇と付き合いだした者にとっては、「70年代以降」を起点にして熱っぽく語る佐伯隆幸の言説は、時として異国の地の舞台のような錯覚を抱くことも事実である。しかしそれは、なにもフランスの劇場で起きていることには限らない。日本の能楽堂でも歌舞伎劇場でも起きていることであり、その意味でも、佐伯隆幸が、それこそ「身命を賭して」書き綴った「フランス演劇の現在」は、他に類を見ない、貴重な証言なのである。

〈追悼〉

佐伯隆幸先生の訃報に接して

伊藤 洋

本会報の校正など準備をしている2017年1月、突然衝撃的な訃報が舞い込んだ。佐伯隆幸副会長が21日早朝、急性虚血性心不全で亡くなったというのである。ほとんど突然死だったとか(享年75)。私が会長に就任して、これから日仏演劇協会の方向や進め方などで教を請い、何かと頼ろうと思っていた矢先の副会長の死とは、哀惜の念断ちがたく無念の限りである。日仏演劇協会としても、親しくしていただいていた私個人としても、心からお悔やみを申し上げ、哀悼の意を表する次第である。

思い出してみると、昨年12月初めにたまたま上野の劇場で一緒になり、駅までの帰り道で歩きながらしばらく話をしたのが最後だったようである。お互いに芝居好きということもあり、それまでも劇場ではしばしばお会いしていた。その時は「京都に『繻子の靴』を観に行くから、またあちらで会いましょうよ」と言われたが、彼の日程を聞くと私の日と異なり、結局会えそうもなかったのであるが、『繻子の靴』の京都公演は12月10日(土)と11日(日)で、佐伯さんは10日、私は11日観劇の予定だった。実際に京都に行ってから、会場で出会った本会の事務局長、根岸徹郎さんに「昨日、佐伯先生が見えただろう？」と尋ねたところ「お見えになっておられなかった」とのことだった。何か用事ができてお出でにならなかったのかな、と思っていた。

あとで奥様に伺うと、彼は京都行きの前に少し具合が悪かったので京都行きを諦めたとのことだった。佐伯さんはクローデルの『繻子の靴』(翻訳・演出：渡邊守章、出演：剣幸、石井英明ほか)を見たがっていたし、実際今回の舞台は、成功作と言えるものだったから、さぞかし残念なことだっただろう。

3月29日(水)に佐伯隆幸追悼講演会「演劇人佐伯隆幸とは誰だったのか」(講演者：佐藤信、高橋治男、渡邊守章諸氏)があり、そのあと「思い出を語る会」も開かれた。予想以上に多くの方々が集まったようであるが、それだけ慕われ、幅広く話題をまいた存在だった。あちらでは今や安らかに、余り人に嘔みついたりせず穏やかに、お休みになるようお願いしている。謹んでご冥福をお祈りし哀悼の心を捧げたい。合掌

